

青少年くらし

家庭版

発行
食数市教育委員会
編集
生涯学習課
☎ 426-3845

12月



「学びながら子育て」後編

令和五年六月一七日に、倉敷市地域子育て支援拠点 ひろばわたぼうし主催で実施した子育て講演会の要旨を二回に分けてお届けします。講師は、神戸大学名誉教授の広木克行（ひろき・かつゆき）先生です。

●年齢に応じた育ちの大切さ

幼児期には幼児期としての育ちや学びがあります。より早く小学校的な学びを求めれば、順調に伸びると思つのは、幼児として生きることを、否定することになります。幼児期のような体験で育つ非認知機能が、学童期の学びで身につく力を支える土台になります。子どもに、夏休みがなぜ必要なのでしょう。暑さを避けるためだけでなく、普段、園や家庭でできないことを体験してもらうためです。幼児期に大切な非認知機能が育つために、夏休みに誰とどこで何をして遊ぶか。その時間が、子どもの脳の育ちにとって大切なのだと意識して、取り組んで欲しいと思っています。コロナが一段落して分かった子どもの変化は、幼児期に育つ非認知機能の育ちが十分なことです。その機能が育ち直すた

めの機会を子どもたちにどう提供するか、幼児教育に関わる人はそれを追求する必要がある。十年以上後に後悔しても始まらないことが、今起きているからです。幼児期を幼児として生きることが大事です。それを土台に、その後いろんな力が伸びて行くのです。ですから小学校も決して中学生になるためにあるわけではありません。小学校は、いろんな友達と一緒に遊べる時期です。三、四年生ぐらいまでは、タイプや性別が違う友達とも一緒に遊べる大事な時期です。思春期には少数の親友と遊び、高校生頃になると、社会関係が広がり、気が合う親友関係が広がって、複数の親友グループが集まって活動する時期、というように育っていくのです。だから、それぞれの時期を満喫することが大切なのです。

ですが、現代社会においては、子どもは、それぞれの時期に大切なことを犠牲にして、競争や勉強をさせられる傾向が強い。親も、将来のためと思って、ついつい先回りするわけです。塾や習い事にも良い面はありますが、それを増やし過ぎると、果たしてそれが本当に子どものためになるのかと、考えてみていただきたいのです。

ただ、コロナ禍での子育ては大変でしたね。孤立感、孤独感を感じている人も多く、子育てで悩んだとき、人に相談せずに、今はスマホに相談するそうです。疑問に対する玉石混合の情報から答えを選ぶ。しかし、これでは孤立状態のままです。スマホに頼る危険性についてもちよつと考えてほしい。

できる限り、困ったときには相談できる人を見つけて、話をすることが大切です。母親一人での子育ては難しいです。女性には母性があるから、子育てできると思ったら大間違い。父親も、子育て教室にぜひ参加して話を聞き、その後、夫婦で一緒に話せると良いです。他に相談できる人がいれば、孤独感は一層減少します。さらに、子育ての専門家に相談する機会も重要ですが、ただその条件は貧弱です。

大事なものは、知識を学ぶだけではなく、子どものためにどう行動するかです。そして、繰り返しますが、コロナを通して

全身で訴えている子どもたちから学んで、非認知機能をしっかりと伸ばしていけるよう、様々なものに触れる体験の機会をぜひ重視していただきたいと思っています。

●子育てで大事なことの復習

ここで、小中高年生までの子育てで大事なことを振り返っておきましょう。

一つは、孤立の壁を破ること。そのためには、子育ての専門家がいる支援センターなど様々な資源を活用する。

二つ目は触れることの大切さです。例えば、子どもにお手伝いをお願いすると、いろんなものに触れます。瀬戸物やガラスだと危険もあるけど、触覚体験も増えるし、手伝いのときにお母さんが「どうもありがとう。あなたがいてくれて大助かりだよ」と言つと、子どもは、跳ね上がりたくなるくらい嬉しい。子どもは人の役に立ちたくてしょうがないのです。小さい子の相手をしたときに、上手だねって言われたら、本当に嬉しい。でも、成長すると小さい子の世話がだんだん面倒くさくなる。小さいときの体験は、すごく大事なことです。

そして三つ目に大事なものは、子どもの話を聞くことです。子どもは、今日体験したことを「ねえ、ママ」と話し始める。そんな時にはしっかりと聴いて下さい。聴いてく



倉敷市立玉島東中学校
2年 大島早葵 (令和4年度)

「私の中のサンタクロース」

(色鉛筆)

小さい頃から思いえがいていたサンタさんを描きました。髭の質感を柔らかそうにし目に光を入れてやさしそうな表情にしました。

れる人がいるともっと話したくなる。そこで生まれるのが、信頼感です。子どもが小さければ、膝の上に乗せるとか、だっこするとか、手を握るとか、触れ合いながら聴くのも大事です。

●話を聞く三つのポイント

子どもの話を聞くとときに、三つのポイントがあります。

一つは、興味をもって聞くことです。子どもの話は繰り返しが多いので、いつの間にか親は別のことを考え始めるのです。一所懸命話しているのに、親の表情があっち向いていると、子どもはだんだん、話さなくなっていくます。そして、思春期になると、子ども(特に息子)は、尋ねても話してくれなくなります。子どもの話は、昨日聞いた話でも、今日は別の話同じじゃないのです。だから、興味を持って、新しい話を聞く

顔で「話してくれてありがとう」と聞くことが大事です。忙しいと難しいですが、子どもの話の途中で上の空になる。この姿勢は見直して欲しい。親子で対話が成り立たなくなると、思春期に破たんするパターンです。

二つめは、聞いた後に「でもね」と言わないことです。

三分ほどでも子どもの話は長い、と親は思うのです。そして、話が終わりに近づくと、親の頭の中では言いたいことが浮かび、終わるやいなや、助言と忠告の虫が騒いで、「でもね」と言ってしまう。「でもね、ほら、いつも言うてるでしょう」と忠告が始まるのです。こうなると、今までの話から離れて、親の話がメインになります。これを繰り返していると、子どもは「話すんじゃない」と学習します。助言を聞きたいんじゃない、自分の話を聞いて欲しいから話すのです。「話してくれてあ

りがとう。よかったねえ」とこれで終われば満点です。そうしたら、子どもはまた明日も、「これママに聞いてもらおう」と思っ

三つ目は、話の後にどうしても言いたいことがあるときの言葉です。

「話してくれてありがとう。で、なにか、聞きたいことがある?」こう尋ねて下さい。そのとき、子どもが「ない」と言ったら、終わらなくてはいいけません。でも、「これどうしたらいい?」って聞き返してくれたら、チャンスです。子どもが話す構えから聞く構えに変わったからです。そうしたら、「ほら、こう考えたらどう?」と伝える。話す構えのときに助言されると、強い抵抗を感じますが、聞く構えになると、親の話を受け止める用意があるので、反発しません。

子どもも一人の人間です。話を無視されたと思つたら、話すんじゃないと学習しますが、聞いてくれた後で、子どもから助言を求めたときには、親が言ったことは、対話として受け止めることができるのですね。

カウンセリングでも、来談者の話が終わる前に助言するのは、カウンセリングではありません。話を聞いた後で、質問があれば、情報提供する。そして、来談者が自ら

気づいて変わっていくような関係を作る。それが本当のカウンセリングです。

話を聞く三つのポイントを意識して、聞いてみてください。子どもを思ふなら、話をしっかり聞き、信頼関係を築いて欲しい。そして、質問してきたら、親の思いを正直に伝えて欲しい。こういう関係を作ることが非常に大切なのです。そうすれば、思春期に様々な問題にぶつかった時に、子どもから「どうしたら良いかな」と相談してくれるかもしれません。そんな親子になったら、家庭は明るくなります。逆に子どもが強く反発する家庭では、自傷行為に走ったり、様々な誘惑に乗ったりします。簡単なようで奥の深い、「話の聞き方」を、知らないかで、子育ては全く違ってきます。しばらく経つと忘れるかも知れませんが、繰り返し読み返しながら学んでいって欲しいです。

失敗を恐れる必要はありません。上手く行かないときにも一人で悩まず、相談し、共感して聞いてくれる、そんな人間関係をぜひ作って欲しいですし、それが子どものためだと思って欲しいのです。

さて、私の話から何か学んでいたから非常に幸せです。真剣に聴いて下さりありがとうございました。

(終わり) (文責 中村麻希子)